

「竹田の子守歌」に込めた思い —多泉和人とはだしの子グループ—

武島 良成

Interpretation and Thought for “Takeda Lullaby” :
OH-IZUMI Kazuto and the Shoeless Kids Group

Yoshinari TAKESHIMA

Accepted November 28, 2012

抄録: 本稿は、尾上和彦（多泉和人）が採譜した「竹田の子守歌」の掘り起しと編曲の背景を検討した別稿を、補足するものである。歌詞・メロディの変遷や、多泉とはだしの子グループ（合唱団はだし）のメンバーたちが歌詞をどう解釈し、どのような気持ちで歌ったのかを分析し、次代に伝えることを目的とする。その際、採譜・編曲・合唱の過程に関する情報のうち、別稿で省略した細かな事項も記す。さらに、合唱団の中心にいた 11 人の、それぞれの思いも付記する。

索引語: 竹田の子守歌, 尾上和彦, 竹田深草, うたごえ運動, 伏見

Abstract : This article is to supplement another article in which I uncovered hidden facts concerning “Takeda Lullaby” transcribed by Kazuhiko ONOE (Kazuto OH-IZUMI) and considered the background of its arrangement. In this article, I perform an analysis of (1) how the lyrics and melody have gone through a transition and (2) how OH-IZUMI and the members of the Shoeless Kids Group (Chorus Shoeless) interpreted the lyrics and felt singing the lullaby for the purpose of passing on the findings to the next generation. In the analysis, I also describe the details of information regarding the process from transcription and arrangement to performance in chorus, which I omitted in the other article. In addition, I append a note to the thoughts of 11 core members of the chorus group respectively.

Key Words : Takeda lullaby, Kazuhiko ONOE, Takeda-Fukakusa, Singing Voice Movement, Fushimi

1. はじめに

筆者は別稿で、1970 年代初頭に大ヒットした「竹田の子守歌¹⁾」の掘り起しと編曲の背景を検討した²⁾。この件の基本文献としては、1973 年の橋本正樹『竹田の子守唄³⁾』と、1978 年の「てい談 竹

田の子守歌⁴⁾」が知られている。その両方で、この歌を採譜・編曲した尾上和彦（当時は多泉和人）が、ことのあらましを語っている。2000年頃から急増した諸著も、この2つをベースに叙述を進めている。その中で特に、2000年の森達也『放送禁止歌』、2003年の藤田正『竹田の子守唄』の記述が詳しい⁵⁾。だが、これら近年の諸著は、史料の渉猟や取材が甘く、この歌がうたごえ運動の展開の中で採譜・編曲されたものだということを充分には捉えていなかった。そのこともあって、ア) この歌がはだしの子グループ（1965年10月以後は合唱団はだし）や全日本自治団体労働組合（自治労）京都合唱団、ひまわり合唱団⁶⁾などが歌い合って、志気を高めた歌の1つだということ。イ) 「はだし」にも他の合唱団にも、部落内外の出身者が所属しており、彼らが一緒に歌っていたこと。ウ) この歌の採譜・合唱が、うたごえ運動における民謡掘り起しの一環として捉えられること、などが無視・軽視されていた。

別稿では、はだしの子グループのリーダー格だった川部昇（同グループは当時の部落解放同盟竹田深草支部内につくられたサークルで、川部は支部のリーダー格でもあった）が保管してきたメモ、ビラや、『自治労京都』『うたごえ新聞』などの刊行物、関係者たちへのインタビューを使い、多泉やこれらの合唱団の活動の経緯を追究し、近年の諸著で語られているイメージを修正した。ただ、その際、歌詞・メロディの変遷、多泉や「はだし」のメンバーたちが歌詞をどう解釈し、どのような思いで歌ったのか詳述しなかった。このうち歌詞の意味については、橋本が一通りの解説を付けており、高橋美智子⁷⁾（1979年）、右田伊佐雄⁸⁾（1991年）の論稿も、民謡との異同について示唆的な内容を含んでいる。また、先の森や藤田の著作も、一部で独自の見解を記している。だが、これらの文献から得られるイメージと、多泉や「はだし」のメンバーたちの解釈には、乖離している点が少なからずある。例えば、③番（以下仮番号）「はよも行きたい（行きたや）この在所こえて」について、橋本・高橋・藤田らは竹田部落内での情景を思い描いているようである。だが、多泉らは離れた所から竹田を思う様子を念頭に置いていたようであり、文意からもその方が自然である。④番の「まだも（またも）竹田の もんばめし」なども、竹田が最も劣悪だという橋本・藤田らの理解と、多泉らの考えには一定のズレがある。③④はこの歌の核心部分であり、多泉や「はだし」の気持ちと乖離した説明だけが定着するようでは残念である。

本稿では、この③④以外の部分も含めて、多泉と「はだし」のメンバーたちが、この歌とどのようにに関わり、どう解釈して歌っていたのかを検討し、次代に伝えることを目指す。その際、採譜・編曲・合唱の経緯に関する情報のうち、別稿で省略した細かな事項も記しておく。また、別稿では、竹田深草支部の合唱活動に、歌の中から社会問題を考えるという狙いがあったことを指摘した⁹⁾。本稿では、「はだし」のメンバーたちが「竹田の子守歌」の歌詞について話し合うなど、ある程度それを実践していたことも示していく。

史料については、別稿で使用したものに加え、川部や野口貢（合唱団はだしの第2代団長）の手元に残った譜面や歌集を使う。また、関係者たちへのインタビューの成果も、引き続き活用する。その際、現在の尾上の談話は、過去のものとは区別して「尾上談」と記すことにする。

2. 「竹田の子守歌」の採譜・編曲・合唱の経緯

まず導入として、「竹田の子守歌」の採譜・編曲・合唱の経緯を、別稿で記した話に肉づけをしなが

ら叙述しておく。周知のように、「竹田の子守歌」の旋律が生まれたのは1964年12月末のことだった。この時に多泉は、東京芸術座の公演「橋のない川」の舞台音楽の創作に苦しんでいた。「橋のない川」は、住井すゑの小説を原作とした奈良の部落の物語だった。多泉は、この舞台音楽のために竹田に通うようになったというような説明をしたが（橋本 pp.83-84）、実のところ1962年12月から通い続けていた¹⁰⁾。尾上談によると、舞台音楽の依頼は上演の半年ぐらい前になされるのが普通であり、「橋のない川」も例外ではなかったという。それならば、依頼は1964年6～7月頃だったことになる。多泉のはだしの子グループへのレッスンは1963年5月から始まり、翌1964年2～3月からはほぼ毎週通っていた。これらのことからすると、依頼があったのは竹田にかなり馴染んだ後だったことになる。

多泉はこれ以前にも、「はたらき蜂」「地底から」「屈原」などの舞台音楽を担当していたが、いつもギリギリに仕上げていたという（尾上談）。「橋のない川」についてもなかなかまとまらず、ヒントを得ようと多泉の下宿に居候していた野口に相談し、その実母（岡本フク）を訪ねたのだった。多泉が借りていた国鉄桃山駅前の部屋と、竹田は約3キロ離れていた。尾上によると、通常はタクシーで通っていたのだという。この時も、録音器材があったこともあり、タクシーで行った筈だということだった。訪問を受けた岡本フクは三味線が上手であり、約20曲の歌詞を語ったり歌ったりした。その際、はだしの子グループの岡田勇も同席しており（野口、尾上談）、「たくさん知っているな」という意味の感想を口にしたという（野口談）。そして、周知のように、岡本が最後に歌った「コイコイ節」の1つのバージョンに、多泉は強烈な印象を受けたのだった。多泉は桃山にタクシーで帰り、この歌の旋律をほぼ1晩で作り直したという。それを、翌1965年1月5日に関西テレビのスタジオで録音した。東京芸術座の公演は12日からだったので、際どいところで間に合ったことになる¹¹⁾。

これを女声の合唱曲として整理し、歌詞を付け直したものが「竹田の子守歌」である。ただ、それが同志社大学の合唱団むぎのメンバーからの依頼だったか、京都電通合唱団員の要望だったのかははっきりしない¹²⁾。また、自治労京都合唱団員だった菱木栄三夫は、初めてこの歌のレッスンしたのは自分たちではなかったかと述べている。その際、多泉から「もんばめし」の説明を受けた記憶があるという（菱木談）。はだしの子グループについては、新年初レッスンは1月29日だという記録が残っており¹³⁾、おそらく一番に歌ったわけではなかっただろう。唐木安義（合唱団はだしの初代団長）によると、多泉は隣保館のピアノ（オルガン？）でこの曲をひき、これは「五木の子守唄」に匹敵するすごい曲だと言ったという。そして、唐木・野口・川部ら「はだし」のメンバーに、この曲の内容を話し合わせたのだという（唐木、川部談）。「はだし」のメンバーの多くは、八幡や久世や吉祥院の部落に子守りに行った守り子が、竹田を思いながら歌っている情景を思い描いたようである。後述するように、多泉は宇治から竹田に帰る様子を思い描いていたようだが、そこまで認識を揃えることはしなかったようである。

はだしの子グループのレッスンは毎週金曜日だったが、この歌を部落解放第10回全国婦人集会で発表するために、3月になると水曜日にもレッスンをした¹⁴⁾。そして、3月29日の集会の文化祭で、この歌の歌唱指導を担当した。その間唐木は、前年10月の「関西のうたごえ」で本選にエントリーされなかったのが悔しくて、多泉に相談し、1月からひまわり合唱団に同行していた。ただ、唐木は所用のために3月29日には参加できなかった。また、多泉や中川正照（川部と並ぶ古参団員）も出席できなかったようである。他方、川部は、3月5日に市役所でトラブルに巻き込まれ大変な時期だったが¹⁵⁾、歌は別だとして参加した。そして、当日の合唱前には、もう一度メンバーで曲の背景について話し合ったという（川部談）。その上で、参加者への歌唱指導をこなしたのだった¹⁶⁾。

この後の4月からも、金曜日のレッスンは続いた。川部は京都水道部落問題研究会¹⁷⁾の1周年行事と、その2年目以降の体制づくりに忙しかった。また、7月の部落解放第9回全国青年集会の準備もしなければならなかった。それでも、この青年集会まではレッスンに出たのだという(川部談)。他方、唐木は、正式にひまわり合唱団の研究生になると共に、3月頃から進めていた京都南部の合唱団との連携を広げる活動に努めた¹⁸⁾。この唐木・野口は、週3回の子ども会活動(隣保館)にも尽力していたが、5月にはその子ども会・うたう会・京都学芸大学(現京都教育大学—以下学大と記す)部落問題研究会(部落研)などが、合同でうたごえ祭典を開いた。なお、この頃の多泉は、レッスンがない日にも竹田を訪れ、野口・岡本フクのところに入り浸っていたようである(川部、唐木談)。

そして、7月末の青年集会(鳥取)では、多泉と「はだし」のメンバーが、「心はいつも夜明けだ」の歌唱指導のために壇上に立った。この時、学大部落研の後野国雄、広瀬哲也らも舞台上にいた¹⁹⁾。臨時の措置だった可能性が高いが、合唱団はだしの結成前から、部落出身でない者も合流していたのである。この集会以後の、合唱団はだしの結成や年末の「日本のうたごえ」での受賞の件は、別稿で一通り記した。はだしの子グループは合唱団はだしに発展的に解消され、10月1日に鴨浜高校で結成式を実施した。そして、「日本のうたごえ」の出場に向けてレッスンを始めた。神戸での予選には、女性も多数参加したようである。ここでエントリーされ、11月末の東京での本選に臨むことになった。東京に行った人数について、各人の記憶はまちまちだが、20人ぐらいだったのではという話が多かった。そしてそこにも、学大部落研の後野、広瀬らが加わっていた。初日(11月26日)のコンクールで、合唱団はだしは「竹田の子守歌」と「こぶしかためて」を歌った。この「こぶしかためて」は、1963年に多泉が「はだし」のメンバーと共につくった歌だった。この合唱により、「はだし」は地域の部の激励賞を受賞した。

この後、学大部落研の後野、柳生(永尾)公子らは、翌1966年4月に4回生になった頃には、卒業研究のために部落研を離れたようである。また広瀬も、合唱にそれ程の興味がなかったため、活動を子ども会に集中させることにした。それでも、彼らは他大学の部落研との交流の中で、「竹田の子守歌」を歌い続けたようである。一方、唐木も、1966年春に「はだし」を離れたようで、新団長は野口になった。この野口を、宮田進と山田耕二(錦林)らが運営面で補佐する態勢がとられたことは、別稿で述べた通りである。

3. 歌詞とメロディの変遷

次に、「竹田の子守歌」の歌詞・メロディの変遷や意味について検討する。周知のように、『解放新聞』1965年4月15日は、半月前の全国婦人集会の報告をするとともに、この歌の譜面と①②③番の歌詞を掲載した。川部が保存する当日のプログラム²⁰⁾にも、これと同一の譜面・歌詞が載っている。この『解放新聞』とプログラムでは、多泉和人の名が「京泉知人」になってしまっているが、これが誤りであることも知られてきた。歌詞は、①「もりもいやがるー ぼんからさきにゃー ゆきもちらつくー こもなくーしー」、②「みてもみやかねー お月とおひーとー たてたかがみとー わかわやーとー」、③「はよもいきたいー この在所こえーとー むこうにみえるー おやのうーちー」と記されている。だが、橋本の著書と対照させると明らかなように、ここにも記載ミスがある。②は正しくは、「みてもみあきぬ お月とお日と たてたかがみと わがおやと」だった(橋本 pp.122-123,

宮田、中川正、広瀬、永尾、尾上談)。尾上は、②は普段歌うようなものでなく、ここに載ったこと自体が間違いだと述べており(尾上談)、野口も当日これを歌わなかったと語っていたようである(藤田 p.11, 165)。

のみならず、①の「ゆきもちらつくし」、③の「むこうにみえるは」の「し」「は」も抜けている。団員たちの多くも尾上も、最初から「し」「は」を付けて歌った筈だと述べている。さらに尾上によれば、6番目の音は半音間違っているという。当時、合唱団の中心にあった唐木は、印刷所に送るのを急かす電話がかかってくるなど、慌ただしかったことを覚えているという(唐木談)。その唐木も多泉も、当日は出席できなかった。チェックが甘くなった原因は、そのあたりにもあったのかもしれない。

さて、この①②③だけでなく、最初から④「久世の大根めし 吉祥の菜めし まだも竹田の もんばめし」、⑤「この子よう泣く もりをばいじる もりも一日 やせるやら」などもあったようである。1967年7月11日の『支部ニュース』4号²¹⁾は、これらを含めて歌詞を①③④の順で載せている。また同年11月3日の「部落解放第1回洛南青年大交流会・討議資料²²⁾」では、①③④⑤の順になっている。野口が保存している譜面A(後述、「まだも」が「またも」になっておりやや後のものか)も①③④の順である。さらに、野口が保存する譜面B(低音パートが拡大したAの後のもの)には、⑥「来いよ来いよと こまものうりに 来たらみもする(し) 買いもする」も入っており、①③⑥④⑤の順で記載されている。これら④⑤⑥が最初からあったことを、尾上、宮田、後野、広瀬、永尾、野口らも認めている。

他方、橋本らが指摘・示唆し(pp.99-100, 123)、それを受け継いで森(p.142)、藤田(p.69)も記したように、⑦「盆が来たとして 何うれしかろう 帷子も(は)なし 帯も(は)なし」は、歌手の高石友也が愛知県の民謡から取ってきたもので、「はだし」は歌っていなかった。先の『支部ニュース』4号、「部落解放第1回洛南青年大交流会・討議資料」にもこの歌詞は現れず、多泉が1970年12月の『京都の民謡²³⁾』に載せた中にもこの歌詞はない。尾上は筆者に、自分が入れたものではない旨語ってくれた。

以上の①～⑥を歌った順番は、『京都の民謡』や1973年に学大部落研がまとめた「第十四回全国学生部落研ゼミナール 竹田こども会の歴史と教訓²⁴⁾」にあるように、最終的に①③⑥④⑤で定まったことになる。ただ、1965年3月の全国婦人集会や同年11月の「日本のうたごえ」では、「3つ」しか歌わなかったようである(野口、唐木、後野談)。この「3つ」がどれを指すのか、彼らもはっきり覚えていないようだが、1966～1968年頃の譜面での扱いから類推すると、①③④ではなかっただろうか。多泉は、⑤を「余韻」に位置づけており(尾上談)、「3つ」に入れると「余韻」の割合が高くなりすぎる。そうであれば、「守りも」「はよも」「久世の」だったと見るのが適当だろう。このような短縮は、他の舞台でも適宜なされたようである。宮田は、最後に④を歌うことも多かったと語ってくれたが、それも⑤を削った結果だろう。他方、1971年の「赤い鳥」のレコード、それを受け継いだ1974年のNHK「みんなのうた」は、①⑦⑥③なので、かなり異なるものだったことになる。それらのバージョンで、③の「はよもいきたい」が「はよもいきたや」と書かれるようになったことも指摘しておく²⁵⁾。

次に、メロディについて記しておく。まず、橋本が『竹田の子守唄』で紹介した「原譜」(p.93)を、『解放新聞』の譜面と照合すると、5・6・7番目の音と27番目の音が下がっていることがわかる。尾上は筆者に、特に6番目の音が間違っていると指摘したが、直した音も「原譜」と異なっていたようであり、「原譜」の前に下書きがあったことになりそうである。だが、それ以上に細かなことはわからない。ともあれ、『竹田の子守唄』での多泉の説明からして(p.94)、この「原譜」が初期のスタンダード

になったことは確実である。

ところが、野口が持つ譜面（A・B）は、「原譜」よりも全体が半音上がっている。これは、尾上によると、合唱団が歌いやすくするための措置だったという。その際、先の「27 番目」の抑揚も大きくされた。この譜面 A の旋律は、広瀬が暗記していた数字譜と完全に一致する。広瀬の活動期間が、1965 年末（及び 7 月の鳥取集会）に限定されていたことから、この時までにはこれらのメロディは定まっていたことになる。また、広瀬が記してくれた低音パートの数字譜も、譜面 A のものと完全に一致する。多泉は間もなく、低音パートをつくり直してそれを曲全体に広げ、かつ「27 番目」を下げたが（譜面 B）、広瀬はこちらは覚えていなかった。これらのことからすると、「はだし」が 1965 年 11 月の「日本のうたごえ」で歌ったのは、譜面 A に対応するメロディだったことになる。そしてその後、譜面 B に移行したのである。

パートの分け方について、広瀬は、全員でまず高音パートを歌い、次に全員で低音パートを繰り返すような歌い方をしたという。野口、宮田らは、団員を 2 パートに分けていたと語ってくれたが、学生仲間とでは歌い方が違ったのかもしれない。なお多泉が、1970 年の『京都の民謡』の「原曲編」に載せたのは、A の高音パートと同じ譜面である。同時に、「編曲編」では、パートを 4 つに分け、ソプラノとアルトの出だしを A・B より上げたものを発表した。このうちソプラノは、一応 A に準拠したものようだが、音の抑揚などが細かく調整されている。このように、多泉は、1964 年末～1965 年初頭に編曲を終わらせたのではなく、その後もこの歌を磨き続けたわけである。そして、多泉がつくった旋律を、フォークシンガーたちが、ギターに乗せるためにアレンジしていった。そして、4 分音符を 8 分音符に分割したり、「27 番目」を譜面 B 程度に下げるなどした。「赤い鳥」がレコードに吹き込んだのは、その 1 つの形態だった。

4. 歌詞の意味

以上のことを確認した上で、歌詞の解釈に移る。①番については特に目新しい情報はなく、今のところ橋本の解釈に付け加えることはない。②については、橋本は特別な意味を見出さず、それは多泉も同様だった。この歌詞は普段歌うものではなかったし（宮田、中川正、広瀬、永尾、唐木、野口、川部談）、団員の多くもあらためて意味を考えることはなかったようである。ただ、学大部落研の広瀬、永尾らは、立てた鏡や親の姿によって、自分が大した存在ではないこと（また部落出身だということ）に気づくという意味だと解釈していたようである²⁶⁾。

③については、橋本が「竹田へ守に来ていた」情景とし、さらに在所²⁷⁾を越えるという部分に「人間の誇りを主張し奪還する全ての行動」という意味を与えた（p.122）。その後、高橋も、「この里へ子守り奉公にきた守り子の歌である」（p.321）とし、森は部落出身でない少女が竹田に来ている情景（p.147, 165）とした。森はさらに、1970 年代末から竹田小学校に勤務していた外川正明の、部落内で部落民の子をあずかった守り子がたまたま外に出たところ（pp.165-166）という解釈を紹介している。また、藤田は、竹田で子守りをしている情景であり、「「脱出」をうたい込めていると私は思う」（p.76）と書いている。

だが、多泉は、岡本フクが宇治に働きに出かけていたことを踏まえ、帰路に当たる桃山丘陵から竹田を見ている情景を思い描いていたようである（尾上談）。宇治への子守奉公のことは、1976 年に尾上

と会った右田の本にも出ており (p.199), 確かに岡本とそのようなやりとりがあったのだろう²⁸⁾。また、右田が竹田で採譜した中に、「早う去にたい あの山越えて あの山越えたら わしのうち コイ コイ (または) 向こに見えるは わしのうち」(p.192) という節がある。竹田を見下ろせる山としては、まず桃山の山塊を想定できるので、多泉の解釈には普遍性があることになる。

他方、川部、唐木、宮田、中川保、菱木らは、吉祥院や久世などの部落から竹田を見ている様子をイメージしていたということである。実際、宮田が描いたイラストは、山の位置からして竹田の西方に守り子がいるレイアウトになっている²⁹⁾。ただ、彼らも場所の特定にそれ程こだわっていたわけではない。宮田は母に守り子の経験を尋ねたこともあったというが、母は、竹田出身で鎌倉に移住した人のところに子守りに行ったこともあったと答えたという。宮田は、それを踏まえて、なおかつ上記のイラストを描いたわけである。

次に④だが、歌詞にある竹田の「もんばめし」(一般に、「おから」を混ぜたごはんと解釈されている³⁰⁾) が、最も劣悪という意味なのか、逆に優越感をにじませたものなのかが論点になってきた。橋本は、竹田の「もんばめし」を最も劣悪なものとして捉え、合唱団員の 1 人が、わざわざ歌うのだから優越の意味ではないかと問うた時には、「どん底の楽天性」という言葉で反論した (p.120)。藤田もこのような見方を受け継ぎ、「もっとひどい」ことをさりと流したものとした (p.81)。竹田の子守唄 CD 制作委員会も、久世や吉祥院のように「大根めしや菜めしを食べられたらまだええ」と説明した³¹⁾。これらの見解は、彼らが前提とした「またも竹田の」という歌詞への説明としては文意に合うように思われる。

だが、上記のように、1967 年の『支部ニュース』4 号、「部落解放第 1 回洛南青年大交流会・討議資料」では「まだも竹田の」と濁音が使われていた。野口の 2 つの譜面以後は「またも竹田の」なのだが、広瀬、永尾、後野、中川正、中川保、川部らは、確かに「まだも」と歌ったと述べている。そして、「まだも」であれば、「まだしも」の意味でとるのが自然なので、最も劣悪という意味ではなかったことになり得る。尾上の談話では、初期には「まだも」と「またも」の 2 つを構想しており、それをやや意味をぼやかした「またも」に統一していったということである。そして尾上は、どちらにしても「もんばめし」が最悪という意味ではなかったと述べている (尾上談)。

この点について、野口は当時深く考えていなかったというが、竹田という言葉が出てくるので、手を大きく回すなどして「自慢げに」指揮をしたと語っている。また、野口が近年考えるところでは、竹田では結婚式に山盛りのおいしい「おから」が出される風習がある (あった) という³²⁾。この「おから」は手間をかけて絞ったものであり、誇るべきものだったのではないかということである。そして川部も、どちらかといえば優越の意味が込められたものと解していたという (川部談)。もっとも、広瀬、永尾、後野、中川正、中川保らは、「まだも」と歌いながら、竹田が一番劣悪だと考えていたようであり、解釈はある程度多様なものだったようである。

その次の⑤⑥については、橋本の解説で充分だろう。

5. 付記 11 人の思い

最後に、尾上を含めた合唱団の中心メンバーたちの、「竹田の子守歌」への思いについて列挙しておく。一律にアンケートをとったわけではないが、筆者は彼らに複数回ずつ話を聞いた (ただし、以下

の11人のうち菱木は「はだし」のメンバーではなく、直接会って話を聴いたのも1回だけである)。また、2012年8月には、このうち7人が出席した、約50年ぶりの同窓会にも参加させていただいた(他に、1966年に学大部落研に入った旧姓M、京都地域人権運動連合執行委員長の山川明仁、同竹田深草支部の旧姓Yが同席)。そして、それらの場から得たものを、名前と1965年3月時点の年齢以下、4点に分けて再構成した—①経歴、②音楽との関わり、③「竹田の子守歌」への思い、④筆者の感想。これらを、「付記」として後世に伝えることにしたい。

尾上和彦(多泉和人) 23歳 ①1959年6月頃に堀川高校音楽課程を中退。②初めて参加した1959年12月の「日本のうたごえ」で、平和の歌、労働者を励ます歌などに接して大きな衝撃を受けた。③宇治から帰ってくる途中に竹田を見下ろしているイメージ。ロシア民謡の「赤いサラファン」、ジャン・シベリウスの「フィンランディア」、黒人霊歌の「深い河」、アイルランド民謡の「ロンドンデリー」などを心に抱きつつ旋律をつくった³³⁾。「五木の子守唄」に匹敵するすごい歌だと思った(これは唐木談による)。この歌が広く日本人に受け入れられたのは、お経と同じリズムだったからだろう。④柔軟な考えを持った常識人。何度も自分と自分の作品について反芻してきたためか、細かな部分まで、かなり鮮明に覚えていた。

唐木安義 17歳 ①合唱団はだし初代団長。1963年春に藤森中学校を卒業し、「はだし」時代は日本蚕毛に勤務していた。中学生の時から竹田深草子ども会に参加し、間もなく部落解放同盟竹田深草支部員になった。②最初の頃の合唱団は下手くそで、あまりやる気は起こらなかった。だが、多泉が指揮した全国電気通信労働組合京都合唱団の公演(1964年4月)を見て考えが変わった。1964年12月の「日本のうたごえ」にエントリーされなかったのが悔しくて、自分を鍛えようとしてひまわり合唱団にも入った。毎日多忙で、1966年春に「はだし」を卒業した。③八幡、吉祥院、久世あたりに行った子守りが竹田を思っている歌だと考えていた。④明るくて社交的な人。荒木栄の「わが母の歌」が好きだと語ってくれた。やりとりした手紙からも、自分を育ててくれた母への感謝の思いが伝わった。それを「竹田の子守歌」の守り子にも重ねていたのではないかな。

野口貢 17歳 ①合唱団はだし2代目団長。1963年春に藤森中学校を卒業し、日本蚕毛に勤務した後、しばらくしてから京都市清掃局に移った。部落解放同盟竹田深草支部には、唐木と同時期に加入した。②中学生の時にギターの練習を始めた(中川保によると、「禁じられた遊び」を弾いてくれたとのこと)。隣保館の青年ルームにあったステレオに興味を持つなど、音楽が好きだった。そして、誰よりも多泉に魅了された。多泉を見てやり方を覚え、「はだし」で指揮者をした。③自分の母が多泉に伝えた歌でもあり、それなりに強い思いを持っている。ただ、当時は、歌詞の意味を逐一深く考えてはいなかった。「竹田のもんばめし」のくだりでは、手を大きくまわすなどして、自分たちの歌だということをアピールした。④明るくて、話が面白い人。子どもにも人気があり、子ども会や合唱団の精神的支柱になったのではないかな。

川部昇 25歳 ①京都市水道局勤務。部落解放同盟竹田深草支部のリーダー格だった。はだしの子グループでもまとめ役だった。②若さを取り戻し、社会の矛盾を見出すために合唱活動をやろうとした³⁴⁾。職場でも、昼休みなどに合唱の手伝いをした。「おいらはたんぼぼ」や「ワルシャワ労働歌」が

好きだった。分裂騒動の中で、部落解放同盟（いわゆる「朝田善之助派」）から個人攻撃を受け、大変な中での合唱活動だった。③八幡，吉祥院，久世あたりに行った子守りが竹田を思っている歌と考えていた。④真面目で几帳面な人。1992 年刊行の支部史編纂の中心にいたこともあり，過去のことを詳しく覚えていた。

中川正照 23 歳 ① 1963 年頃に京都市清掃局から交通局に移った。川部と共に竹田深草支部の中心人物だった。②うたごえ喫茶に何度か行ったことがあり，そこで労働歌を覚えた。その経験を活かし，橋本製作所に勤務していた 1960 年頃に，労働組合で歌の指導をした。はだしの子グループ結成後はほぼ毎回顔を出した。③「はだし」の合唱は決して上手なものではなかったし，最初は良い歌だということに気づけなかった。④川部と共に，年長者として支部と合唱団を支えていた。

宮田進 16 歳 ① 1964 年春に藤森中学校を卒業し，柳本製作所に勤務した。後に京都市清掃局に移った。竹田深草支部には 1965 年後半に入った。②毎日が忙しくて，しんどい中での合唱活動だった。鴨浜高校で，鍵を受け取り部屋を開ける役を務めた。「三交代節」に自分の生活を重ねていた。③子守りでどこに行っていたのか母に尋ねた。八幡，久世，吉祥院あたりから竹田を見ているイメージを持ち，歌集にもそのようなイラストを描いた。「もんばめし」を母に聞いたら知っていた。低音パートを担当した。④目立つのが嫌いだが，真面目で仲間のために頑張ろうとする人。他のメンバーと，それぞれの長所を活かして協力しあってきたのではないかな。美しい歌声の持ち主。

後野国雄 20 歳 ①舞鶴出身で，1963 年春に学大に入学した。京都大学に行って警察官などの堅い職業に就きたかったが，不合格だった。目的を見失っていた時に誘われて，部落研活動を始めた。上級生が少なかったので³⁵⁾，間もなく部長として全体をまとめることになった。卒業後は京都府の中学校教師になった。②ギターが弾け，フォークソングも演奏していた。③「来いよ来いよと」の歌詞が最も印象に残っている，買ってやる，負けるものかという思いに感情を込めた。「向こうに見えるは」という言葉に込められた思い，「もんばめし」に込められたメッセージなど，本当に良い歌だと思う。「もんばめし」は，容器に残った飯を集めたものと考えていた。④学大部落研の全盛期を築いた人。子どもにも慕われ，一緒にスケートに行ったり，理容師志望者のために共に職場の話聞きに行くなどしていた。

柳生（永尾）公子 20 歳 ①東九条の出身，1963 年春に奨学金を得て学大に入学した。本当は京都大学に行きたかった。卒業後は京都府，さらに京都市の中学校教師になった。②合唱団はだして集中的に合唱の練習をした。おなかが空くので練習後に沢山食べることになり，太るねと言いつつ。多泉には，「斎太郎節」など色々な歌を教えてもらった。③きれいな歌。竹田の近くの一般の村に行っている情景を思い描いていた。「五木の子守唄」と歌詞のイメージが共通すると感じていた。④後野や O（部落研の熱心な部員）と同級生で，この 3 人は同じ理学科に所属していた。部員同士，仲が良かったようである。

広瀬哲也 19 歳 ① 1964 年春に学大に入学し，後野の次の部落研部長になった。大阪の京橋から通っていた。卒業後は京都府の中学校教師になった。②合唱はあまり好きではなかったが，「音痴製造

機」と称して（これは永尾談）ギターを弾いていた。「日本のうたごえ」で東京に行った時に、会場にアコーディオンがずらっと並んでいたことを覚えている。③「竹田の子守歌」の歌詞について、部員たちで熱く話し合った。④謙遜しているが、「竹田の子守歌」の譜面を完全に暗誦しており、音楽のセンスもある人。「こぶしかためて」も好きだったという。

今道（中川）保子 12 歳 ①竹田小学校を 1965 年春に卒業し、藤森中学校に進学した。小中学校を通して、子ども会の中心メンバーの 1 人だった。②隣保館での合唱に参加し、1968 年には「竹田フォーク・キャンパーズ」を結成してヴォーカルを担当した。労働歌よりもフォークソングが好きだった。自分の名前を言っただけで、多泉が音域を聞き分けてパート分けをしたことを覚えている。③八幡などに行った守り子が、竹田を思う歌だと考えていた。④学大部落研と同じ部室の「平和を守る会」の O を、兄貴分として慕っていた。

菱木栄三夫 22 歳 ①京都市水道局勤務、川部の同僚で自治労京都合唱団員だった。川部がつくった水道部落研に入った他、音楽活動やカンパでも、川部を助けていた。②1962 年 1 月の誕生以来、自治労京都合唱団で活動した。多泉の桃山の下宿にも、一時期指揮の練習に通った。「日本のうたごえ」には毎年のように参加した。③八幡あたりの部落に行った守り子が、木津川を挟んで竹田を思っている歌と考えていた。自分たちが最初に「竹田の子守歌」を歌ったのだと思う。④自治労京都合唱団のことを詳しく覚えている人。「はだしの子グループ」の初期に、何度か隣保館に足を運んでいた。

6. まとめに代えて

以上、「竹田の子守歌」がどのように採譜・編曲され、はだしの子グループ、合唱団はだしのメンバーがどのように解釈して歌ったのか、その詳細を示した。「はだし」のメンバーの多くは、この歌の情景を、他の部落に働きに行った守り子が竹田を遠望しているものと考えていた。「もんばめし」については、竹田が一番劣悪だと考えた者が多かったが、多泉・野口・川部らは必ずしもそう思っていない。なかつた。「はだし」のメンバーたちは、この歌を部落問題を考えていく 1 つの手がかりとしており、「もんばめし」に限らず、各々がある程度幅のある解釈をしていたのだった。

なお、多泉は「こぶしかためて」「竹田の子守歌」の後、1966 年にも「はだし」のメンバーと相談して「つるはし持つ手」をつくった。他方、和歌山市の鳴神で生まれた「おいらはたんぽぽ³⁶⁾」も、京都に伝わり、「はだし」にも歌われていた。先に記したように、川部が特にこの歌を好んだようである。また、京都大学部落研の田中班のリーダー格だった鈴木正昭（1962 年入学）も、これを合唱に取り入れ、自らも「日雇いの母さん」などをつくった³⁷⁾。はだしの子グループは、1965 年 3 月の婦人集会で、「竹田の子守歌」と共にこの歌の歌唱指導も行った。これらの歌は、うたごえ運動の主催者だった関鑑子が編集した『青年歌集³⁸⁾』にも収録されておらず、近年の諸著でもほとんど取り上げられていない。かろうじて、藤田が「こぶしかためて」の 1 番の歌詞を紹介した程度である（pp.11-12）。だが、消滅を防ぐだけでなく、部落解放運動に加わった青年たちの思いに迫るためにも、これらの歌も取り上げていくべきだろう。

最後になるが、1960 年代後半の解放運動の分裂後、竹田深草支部は部落解放同盟正常化全国連絡会

議（正常化連）、さらに全国部落解放運動連合会（全解連）に所属することになった。そして、合唱団はだしも、正常化連の行事で公演をすることが多くなった。他方、部落解放同盟（朝田善之助・松井久吉の系統）が合唱活動を積極化させたのは1970年代だった³⁹⁾。その中心にいた作田晃らがつくった歌は、CDで販売されており容易に入手できる。だが、その活動は「はだし」と断絶しており、彼らが歌った「竹田の子守歌（唄）」も、「赤い鳥」系統のものだったことを断っておく⁴⁰⁾。

注

- 1) 尾上が採譜・編曲したこの歌は、「・・・子守唄」という表記と混用されているが、初期には「・・・子守歌」と記されることが多かった。尾上が自分の歌は「・・・子守歌」と語っていることもあり（尾上談）、本稿では「竹田の子守歌」と記す。
- 2) 拙稿「「竹田の子守歌」の文脈—京都のうたごえ運動の一環として—」、『部落問題研究』203号：80-98、2013年。
- 3) 橋本正樹『竹田の子守唄』、1973年、私家版。
- 4) 尾上和彦，右田伊佐雄，東上高志「てい談 竹田の子守歌」、『部落』30巻8号：30-56、1978年。
- 5) 森達也（デーブ・スペクター監修）『放送禁止歌』、2000年、解放出版社。藤田正『竹田の子守唄—名曲に隠された真実』、2003年、解放出版社。
- 6) 中央合唱団と同じ目的で京都に置かれた合唱団。
- 7) 高橋美智子『京都のわらべ歌』、1979年、柳原書店。
- 8) 右田伊佐雄『子守と子守歌』、1991年、東方出版。
- 9) 川部は、合唱の目的の1つを、「歌の中から矛盾を引き、それをどのようにしたらいいかということ」を歌の中から知るということ」に置いていた（川部蔵「1962年① 部落研雑記帳 竹田狩賀町川部昇」の冒頭の記事）。また、隣保館でのレッスンに参加した今道保子（中川正照夫人）は、1968年にY（後に部落解放同盟正常化全国連絡会議の竹田深草支部に参加）らと竹田フォーク・キャンパーズというバンドを結成した。その歌集「夜明けを歌おう」（野口貢蔵）で、「竹田の子守歌」を含む21曲を「シミジミうたえば、考えさせられる歌」に分類した。
- 10) これらの展開の概略は、前掲拙稿を参照。
- 11) 尾上は1月5日という日付けを鮮明に覚えていた。東京公演が12日からだったことから、5日は関西テレビでの収録日だったと考えられる。
- 12) 「てい談」には電通京都合唱団の女声メンバーの希望だったと書かれているが（p.38）、尾上は同志社大学の合唱団むぎの依頼ではなかったかと語っている。
- 13) 川部が所蔵するファイル「うたごえ活動・他 64～」に収められた「唐木メモ」による。
- 14) 「唐木メモ」による。
- 15) 川部蔵「館閉鎖・分裂攻撃他 65～」に収められた3月10日「町内のみなさんにうったえます」などを参照。
- 16) 「館閉鎖・分裂攻撃他 65～」に収められた「部落解放第10回全国婦人集会記念文化祭プログラム」、部落解放同盟中央青婦対策部「解放めざす婦人のあゆみ」。また、『解放新聞』1965年4月15日などによる。

- 17) 川部らが京都市水道局の職員を集めてつくった組織。下水道部に部落出身者が多いことや、吏員昇格の不公正を指摘し、労働組合を通して事態を改善しようとした。
- 18) これらは「唐木メモ」を参照。
- 19) 後野、広瀬談。川部蔵の写真に写っている部員のTも参加していたことになる。
- 20) 先の「部落解放第10回全国婦人集会記念文化祭プログラム」。
- 21) 川部蔵「市長選・ニュース・洛南うた・分裂攻撃批判 67～」に収められている。
- 22) 「市長選・ニュース・洛南うた・分裂攻撃批判 67～」に収められている。
- 23) 日本音楽研究会編『京都の民謡』, 1970年, 音楽之友社。多泉は「原曲編」(p.11)と「編曲編」(p.38)にこの歌を載せた。
- 24) 川部蔵。
- 25) それまで「はだし」のメンバーも、歌う時には「行きたや」と発声していたようである(中川保, 川部, 尾上談)。
- 26) なお、近年、竹田の子守唄CD政策実行委員会は、「人生がどうにもならないという意味合い」だと説明した(『竹田の子守唄 ふるさとからのうたごえ』, 2010年, p.10)。これは、永尾や広瀬の解釈と共通性があると言えるかもしれない。
- 27) ここで言う「在所」について、橋本は未解放部落の意味だとし(p.122), 外川正明も「京都では間違いなくそうです」と述べたようである(森 p.159)。これらに対し、藤田は「京都地方における「在所」は、被差別部落だけにかぎらない」としている(p.32)。川部や唐木の理解でも、未解放部落だけを指すわけではないということである。
- 28) 野口も、母の岡本から聞いたという奉公の話詳しく語ってくれた。ただ、宇治に行ったのは子守りではなく茶摘みだったということである。
- 29) 野口蔵, 1970年頃の歌集に描かれたもの。
- 30) これは、竹田出身の合唱団員にも共通する理解である。
- 31) 竹田の子守唄CD制作実行委員会『竹田の子守唄 ふるさとからのうたごえ』, 2010年, p.9。この委員会には、先の外川らが参加している。
- 32) 中川正, 中川保, 川部らの結婚式でも、確かに山盛りの「おから」が、酒で煮た鯛と一緒に出されたという。
- 33) 藤田の著書では、この中で「赤いサラファン」「ロンドンデリー」があげられている(pp.15-17)。橋本の著書では、「フィンランディア」があげられている(p.92)。
- 34) 先にあげた「1962年① 部落研雑記帳 竹田狩賀町 川部昇」の冒頭部の記事。
- 35) 1963年の新年度が始まった頃、それまで熱心に活動してきた4回生のKが病気になり、部落研は廃部の危機を迎えていた。
- 36) 堀川太一作詞, 須藤五郎作曲。堀川は鳴神の活動家。
- 37) 鈴木のかとは、京都大学部落研の後輩である雑賀光夫(1963年入学), 湯山哲守(1964年入学)の談話による。鈴木はひまわり合唱団にも入っており、そこで習った少し異なる「おいらはタンポポ」を、「正調」として紹介したことがあったという。
- 38) 関鑑子編『青年歌集』1-10, 1951-1969年, 音楽センター。
- 39) この件については、作田晃, 中野博喜, 師岡佑行「差別裁判うちくどう」(『部落解放』67号, 1975年)のpp.167-171, 寺本知ほか「音楽創造の課題」(『部落解放』73号, 1975年)のpp.86-97な

どを参照。

- 40) 部落解放歌集制作委員会『きょうだい』（部落解放歌集第1集）（1975年，解放出版社）のp.29に譜面が掲載されている。

文献一覧

1. 藤田正『竹田の子守唄一名曲に隠された真実』，2003年，解放出版社
2. 橋本正樹『竹田の子守唄』，1973年，私家版
3. 右田伊佐雄『子守と子守歌』，1991年，東方出版
4. 森達也（デーブ・スペクター監修）『放送禁止歌』，2000年，解放出版社
5. 尾上和彦，右田伊佐雄，東上高志「てい談 竹田の子守歌」，『部落』30巻8号：30-56，1978年
6. 関鑑子編『青年歌集』1-10，1951-1969年，音楽センター
7. 高橋美智子『京都のわらべ歌』，1979年，柳原書店
8. 竹田の子守唄CD制作実行委員会『竹田の子守唄 ふるさとからのうたごえ』，2010年
9. 武島良成「「竹田の子守歌」の文脈—京都のうたごえ運動の一環として—」，『部落問題研究』203号：80-98，2013年
10. 寺本知ほか「音楽創造の課題」，『部落解放』73号：86-97，1975年
11. 作田晃，中野博喜，師岡佑行「差別裁判うちくだこう」，『部落解放』67号：167-171，1975年

新聞

1. 『解放新聞』1965年4月15日

川部昇所蔵史料

1. 「1962年① 部落研雑記帳 竹田狩賀町 川部昇」
2. 「うたごえ活動・他 64～」に収められた「唐木メモ」
3. 「館閉鎖・分裂攻撃他 65～」に収められた「町内のみなさんにうたえます」，「部落解放第10回全国婦人集会記念文化祭プログラム」，部落解放同盟中央青婦対策部「解放めざす婦人のあゆみ」
4. 「市長選・ニュース・洛南うた・分裂攻撃批判 67～」に収められた『支部ニュース』4号，「部落解放第1回洛南青年大交流会・討議資料」

野口貢所蔵史料

1. 譜面「竹田の子守唄」（左側にA，右側にBがコピーされているもの）

2. 竹田フォーク・キャンパーズ「夜明けを歌おう」
3. 1970年頃の歌集